

長内陽介さん。お店で

下北沢ってバザールの感じがある。まちがまるごとバザールって感じになってもらいたいわけ。盆地みたく、下にお店があつて上に家がある。谷間のまちなんですよ。ごちゃごちゃしてるけど、坂も路地も面白い。

狭いスペースのせいもあるけど、平面のまちだったらきれいごとのまちになつてしまつたと思いますよ。余裕がないからいろんな顔が出てくるんじゃないかな。買物に来る人で賑わう昼の顔と、深夜の店だつてある夜の顔もあるでしょ。

若い人ばかりの店でなくつて、下北には六十年代や七十年代の文化を背負つていた人たちのたまつてる店だつてあるんですよ。だから、意外にさまざまな世代の来るまちなんです。

多くの付き合つてる範囲でみると、個人のお店が多いんですよ。若い人がやつてる店が一所懸命それぞれの顔を出そうと工夫しているのが、まちを活気づけているんじゃないかな。大きな資本では、ほんとの個性はとも出せないですから。

下北になんとか演劇スペースを維持しようとしているメンバーなんかみても、やっぱり個人的な情熱がベースなんです。もちろんお店の経営者だつてそうですから、こういう気持がどんだん横広がりにつつていくと、もつともつと魅力が出てくるんじゃないかな。

下北沢のまち

若い世代のやっているお店の横のつながりを大事にしたいという長内陽介さん。下北沢のまちに惚れ込んでいる一人だ。

まちがまるごとバザールって感じになつてもらいたい。

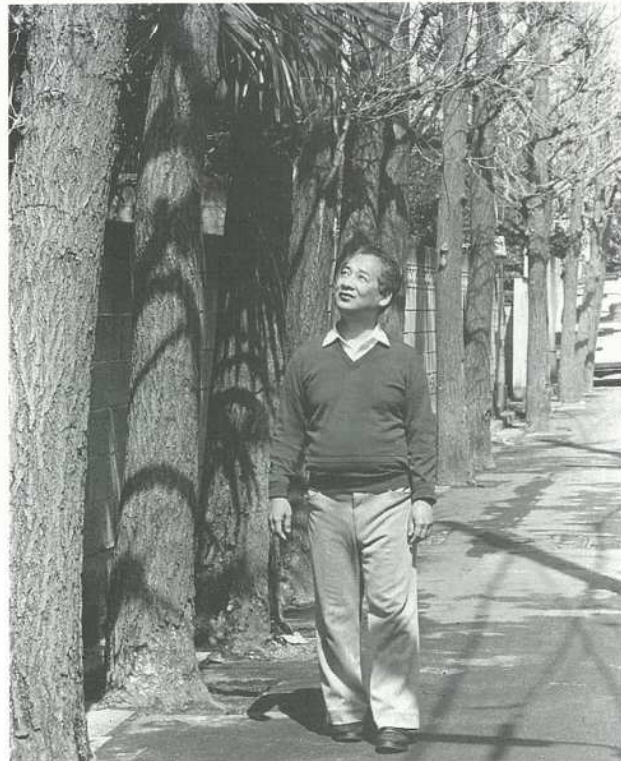
主人の誕生祝いに植えた苗木がルーツです。 焼夷弾の延焼も防ぎました。

植えられた木の風景——松原のミニいちよう並木



佐々木道子さん

住宅街の小さな一角にあるミニいちよう並木は、昭和を通して幾度も姿を変えてきた松原の町のものいわぬ証人でもある。ここに昭和のはじめイチヨウの苗木を植えた佐々木家の夫人佐々木道子さんにお話をうかがった。



ずいぶん大きくなったなどご主人の佐々木賢一さん。下は植えたばかりの頃



——百景の中には並木のある風景がいくつか選ばれています。このイチヨウ並木がいちばんかわいらしいですね。初めて見ると、ちょっと不思議な感じがします。

——せたがや百景にここが選ばれるかもしれないと、ご近所の奥様方もずい

ぶん力を入れて下さいました。百景に選ばれて、このイチヨウを植えた主人の亡父もたいへん喜んでいました。主人の賢一は昭和七年の生まれなのですが、その誕生祝にイチヨウの苗木を父が植えたのです。植えたばかりですから幹も細くて丈も一メートル

ルくらいだったそうです。五十年もたちましたから、ずいぶん大きくなりました。

——家の前の道に植えたわけですか

——いえ、この六丁目二番と二三番の一部は、佐々木家の別荘でございました。庭先に道を作ってイチヨウの

苗木で並木を作ったと聞いております。本宅が青山にありましたので、父が外苑のイチヨウ並木のミニチュアにするつもりで植えたのだそうです。ここに昭和の初めのころ、父の六郎が祖父の忠次郎が別荘を構えたのですが、どちらかはちょっと聞いておりません。主

人は学者ではありませんが、佐々木家は三代つづいた学者の家で、父も工学博士、祖父の忠次郎は理学博士でした。国蝶のオオムラサキの学名には祖父の名があるそうです。昆虫の研究をしていたそうですから、そんな関係で別荘を建てたのかもしれないですね。当時は

まだこのあたりは郊外だったのでしょ。北杜夫さんも近くにお住まいですが、お書きになった「楡家の人びと」にもだんだん開けてきたそのころの様子がかかれておりますね。

——佐々木さんはずっとこちらに。はい、戦災で青山も焼けて、ここ

も焼けてしまったのですが、敷地内に建てておいた家が焼け残ったものから。焼夷弾の炎が回ったのですが、イチヨウの並木が火を防いで六軒の家作だけは無事だったということがございます。イチヨウの葉は水分が多いものですから火に強いんですね。イチヨウ

ウのおかげで戦後の苦しい時に助かったのです。

——向うにある古い家がそうですか。

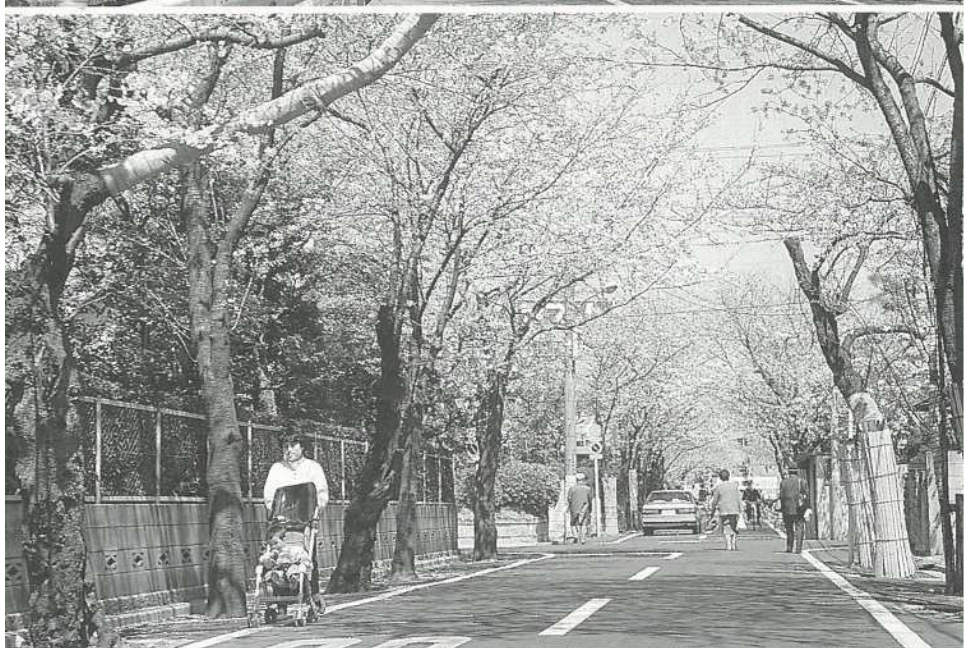
——そうです。戦後いろいろありまして、相続税などもあります。ただ今では家作だった二軒、現在もお貸ししておりますが、それと私どもが住

世田谷のまちには桜並木が目立つ

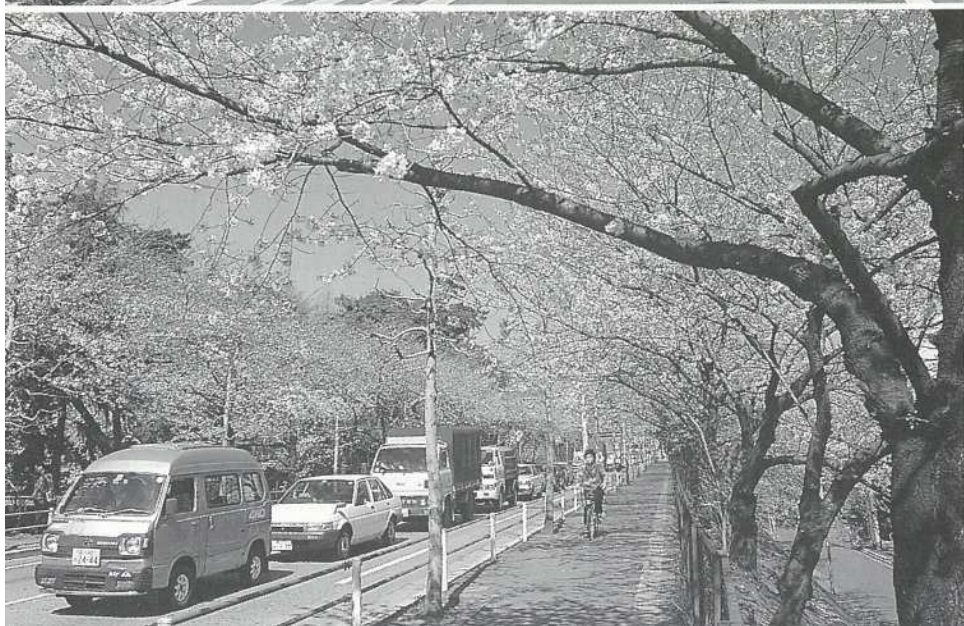
新学年を飾る日大文学部の桜



上北沢、助骨通りの桜並木



大蔵団地の桜は団地名物だ





ハナミズキ並木をゆく三谷益巳さん

「私どものショッピングセンターがオープンしたのは昭和四十四年の十一月ですね。郊外型のショッピングセンターとしては当時日本で最新、第一号といわれました。私どもがこへ来てびっくりしましたのは、国分寺崖線と、得がたい大自然である多摩川に挟まれたところだということです。当時は広々とした水田が広がっていたんです。大きなコンクリートの建物にするのはやむを得ない面もありますが、しかしなんとか緑の豊かな郊外ら

ハナミズキがまちに四季の移ろいを告げるんです。



モダンな感じのするアメリカハナミズキ

はなみずき並木の二子玉川界わい

顔 / の / 前 / の / 駅

んでいるこの家だけです。この道も私道だったので、区に移管して、今は区道になっています。

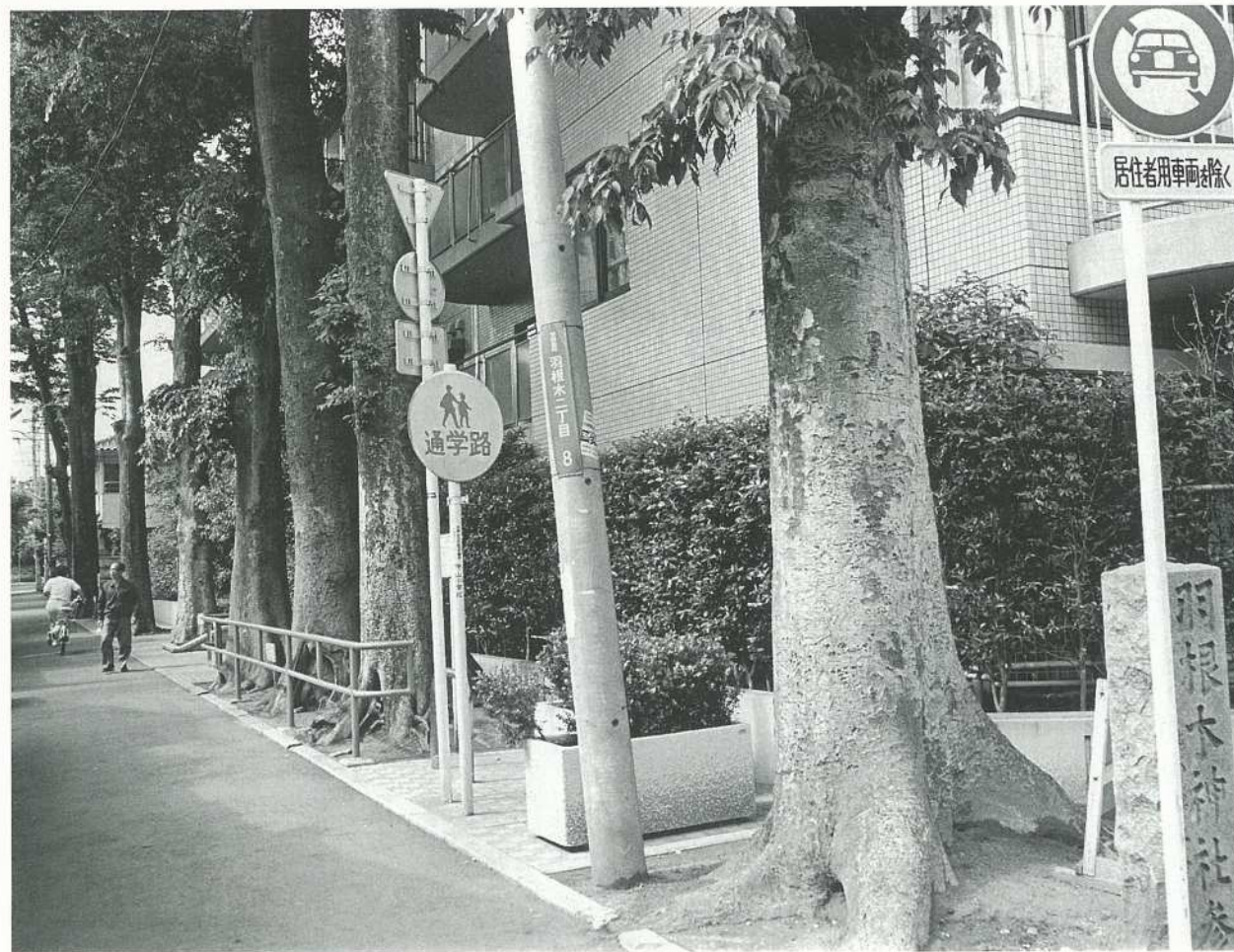
味わいのある通りですね。大正ロマンというか昭和モダンというか。昭和十一年に建てたそうですが、貸家といっても四、五部屋はあって応接間もついて、二十五坪くらいの広さがあります。敷地も一区画七十坪くらい、昔はゆとりがあったんですね。外板も南京下見で、ポーチもチューリップのかたちでちょっと西洋館風でした。家賃が三十五円だったそうです。学者や軍人、外交官の方にお貸していましたが、当時とすればモダンだったのかもしれないですね。

今でもここはとても静かなところですね。

車あまり通りませんから。秋にイチョウが黄色くなって風の強い日なんかに散りますでしょう。道が真黄色になってとてもきれいです。近くの幼稚園の先生やお子さん達が落葉を拾いに見えます。落葉掃きは半日もかかってしましますが、午前中は残しておいて夕方に掃くとか時間を見計らっています。車イスの方もよくおいでになりますよ。

このあたりで道を聞くと、イチヨウ並木の誰々さんとか道のどっち側とかいえば、すぐにわかります。父が大事にしておりましたから、百景になってご近所の皆様に親しまれて、泉下で喜んでくれると思います。

植えられた木の風景——松原のミニいちよう並木



羽根木神社の参道



花みず木フェスティバル。 brassバンドも参加◎



春には「花みず木フェスティバル」も催されます。

当時は二四六号線のバイパスがまだありませんでしたから、通過車両の排気ガス公害で枯れてしまったり、去年は咲いたが今年は花が咲かなかったとか、バイパスが通るまでには苦労もありました。

——当時二四六号線は歩車道の区分はガードレールだけでできていましたから、地元で東京都にお願いして現在のような歩道車道のはっきりとした区分にしてくださいました。歩道に街路樹も植えることになりまして、地元の皆さんから高島屋のところに咲いているハナミズキがなかなかいいから、あれを町のシンボルにしようじゃないかという声が出てきました。みなさん方と一緒に都へお願いしたわけです。ハナミズキは高価だし手入れもむずかしいということだったので、皆さん熱心でしたし将来的には維持管理も地元ですということになりました。ハナミズキの赤と白、これにニセアカシアを交互に植える並木ができました。ただ、ニセアカシアは成長が

早くハナミズキは成長が遅いものですから、すっかり負けてしまっていて、枯れたり花が咲かなくなってしまうたりしてきました。そこで、地元でニセアカシアを抜いてハナミズキに植え替えまして、六十年には全てハナミズキになったわけです。

ハナミズキがだんだん見られるようになりますと、ハナミズキを中心にしたお祭りのようなものをやろうじやあないかという話がみんなの間に芽生えてきました。五十八年の四月の末から二子玉川「花みず木フェスティバル」という名称で通りの小公園を使って始まったのですが、従来の盆踊りや秋祭りや違ってフレッシュな面も出てきます。駅の東側と西側が一体になった祭りです。並木ということで玉川町全体のまちづくりを進める上でもピッタリしたフェスティバルになっていると思います。ハナミズキの通りが増え、また、兵庫島の公園や谷川の緑道にも植えれば、五年、十年、二十年のうちにはハナミズキでいっぱいになるんじゃないでしょうか。世田谷区の区道にも白いハナミズキが多いようですが、区の第二の花になってくれるかもしれないと期待しています。

——フェスティバルはいま五回目の打ち合わせに入っていますが、六回目あたりには、アメリカのジョージア州のアトランタ市との提携の話もあります。アトランタは市の花がハナミズキなものですから、いろいろなルートで働きかけていますが、先方もなかなか乗り気のようです。日本から桜の苗木を持ちこんで桜の名所をアトランタに作るとか、夢が今ふくらんでいるところです。



奥沢駅前広場の噴水◎

季節感の漂う歩道◎



顔 / の / 前 / 駅



田園調布のいちよう並木◎

水車小屋が五つあった。野川の際まで水田だったんだ。

世田谷の農村風景

大蔵の移り変わり

長島修三さんは六十三歳、息子の常三さんは三十七歳、どちらも農業のベテランである。話をしている土への愛着がひしひしと伝わってくる。都会の中で農業がつくる緑の空間が人々に潤いを与えていること、新鮮な野菜を供給していること等々、都市農業は見直されてきた。世田谷の原風景ともいえる大蔵、宇奈根は今後どう変貌していくのだろうか。



長島さん親子。一家で農地を守ってきた。

常三さんの話

農業を継ごうと決意したのはここに東名高速ができたときです。ちょうど学校を卒業するところで、親父がもし継ぐのなら埼玉のほうに代替地を買っておこうというんで。今、狭山に百アールほどあります。秋に大根を作っていますが、通勤農業ですよ。こちらに畑が五十アール、春は小松菜なんかの軟弱物、夏はトマトやキュウリをやっています。後継者のいる専業農家もこの地区では私のところだけになってしまいました。農地の確保が大変ですね。固定資産税は高いし、相続税も大きいですが、でも、黒い土の広い畑が作物が成長するにつれてだんだん緑になっていくでしょう。気持ちのよいものですよ。都市の農地を保持していくことを一般の市民の皆さんや消費者にアピールする意味もあって、今うちも庭先販売をやっています。できるだけ新鮮な野菜を家庭に届けるということで泥つきのまま並べています。近所の方々にも利用していただいていますし、うちのはちょうどサイクリングコースに面しているものですか、遠いところは三軒茶屋や川向こうの狛江や川崎の方なんかも買いに来ていただいています。

でも急激には変わらないんじゃないんですか。子どものころといちはん変わったのは水ですね。遊歩道になりましたが六郷用水もずいぶんきれいでしたよ。子どもの時は魚やザリガニがとれましたから。親父のころは泳げたそう、昔は六郷用水から舟で多摩川に下っていったっていいいます。多摩川もきれいでした。水も多くてね。夏休みには泳ぎに行つてモリで魚をついたりしました。川の流れをゆるめるんでしようが、ジャカゴといって金網の中に石が入っている間に魚がたくさいますから。また、投網を打つたりしてよく遊んだものです。セイゾウという鯉に似た魚なんかがけっこうとれたものです。

修三さんの話

うちにあるいちばん古いものは寛政年間のものだな。裏の山の長島家の稲荷は代々うちで守ってきたんだが、二月の初午には長島のものが二十人近く寄るんだが、そのときの太鼓ね。職も天保四年つてのがある。うちの貴重品だよ。新田義貞の鎌倉攻めの話も伝わっているんだが、ここいらは世田谷でもずっと昔から村のあったところなんだそう。米を作っている農家は今では一、二軒になってしまつて、珍しいから田植えなんか小学校から見に来ている。でも昔は米をずいぶん作っていたんだ



永安寺。大蔵の変遷をこれからも見つめていこう⑧

砧小学校の桜。常三さんの子ども時代と変わらず見事に咲く⑨



ね。野川の際まで田んぼだったんだ。今の人にはちよつとわからないかもしれないが、水車小屋で米をついたんだ。たしか五つ。安藤信車に山本車、大蔵

の谷戸車、浜中車、鎌田車。鎌田の車尻つていつてみんな五つね。安藤信車のように人の名がついているのはその人の営業用で、つき賃をとつてました